

説教 『聖霊と共に荒野をさまよう』山本 護 牧師  
聖書 詩編 91:11~12/ルカによる福音書 4:1~13

「主はあなたのために御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる(詩編 91:11)」。私は、些細なことに考え込み、慎重にすべきところを直感で決めることがあり、教会の牧者としてどうなのかなあ、とたまに思う。しかし聖霊はそんな「偏り」さえも用いて導いてくれている。「道のどこにおいても守られる」とある通りだ。「あなたをその手にのせて運び、足が石に当たらないように守る(91:12)」。この言葉もまさしく実感。何も私だけに限るまい。キリストの身体である皆さん(エペソ 4:16)にとっても、詩 91 編全体が、じんわり自分のこととして感じられるだろう。

ところが信仰者を守っている神の言葉は、悪魔も使う(ルカ 4:10~11)。悪魔とは凶暴な怪物ではなく、言葉巧みに「誘惑する(4:2)」存在。イエスは洗礼を受け(3:21)、聖霊に満たされると「霊の内に在って荒野を彷徨った(4:1 私訳)」。霊の導きで真理を得た、のではない。むしろその逆に見える。空腹時(4:2)に悪魔は、「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ(4:3)」と水をむけ、御自身の空腹以上に「人々を飢餓から救いたい」という思いを揺さぶった。だがこれは律法によって斥けられる(4:4,申命 8:3)。キリスト者は、イエスが国々を治められたなら(ルカ 4:6)平和が実現するのに、と期待する。これも律法によって斥けられる(4:8,申命 6:13)。それならばと悪魔は、「神への信頼」に触れる御言葉の罠を仕掛ける(ルカ 4:9~11)。そして、これもまた律法によって斥けられる(4:12,申命 6:16)。

悪魔の誘惑は荒野で起こった。聖霊に満たされ「霊の内(ルカ 4:1)」にあるのに、なぜ危なっかしい荒野を彷徨させられるのか。では、荒野でない場とはどこか。城壁都市のエルサレムが想像される。この町には神殿があり、祭司が儀式を執り行い、聖書を教えるラビは数多く、金と物が市中に溢れて活気もある。痩せた荒野と、殷賑なる都市とのなんという違いか。だが川柳に「鉄格子いったいどちらにかかるやら」とあるように、城壁は秩序に囲われる柵でもある。エルサレムには王権と神殿がありはしたが、真の支配者ローマ帝国によって保たれた安寧だった(pax Romana)。世俗の価値も信仰も、税を搾れるように整えられ、悪魔の誘惑に慣れきって気づかない。都市にはそんな息苦しさがある。

権威ある信仰や多くの支持には惹かれるが、教会はこれを自戒したい。教会は神殿なのか、むしろ荒野ではないのか。イエスに従うがゆえに私たちは「霊の内に在って荒野を彷徨う(4:1)」。教会とは誘惑を避ける場ではなく、それと対決する場ではないのか。人道的に見えようと、評価につながろうと、「もしわたし(悪魔)を拝むなら、みんなあなたのものになる(4:7)」という誘惑に「否」を言うこと。イエスの十字架は、悪魔にたらしこまれた世に「否」をつきつけ、愛を貫いた結果であった。傍から見れば敗北だが、悪魔と死に勝利し給う十字架を信頼し、希望とし、私たちの道しるべとしたい。

「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた(4:13)」。一時的に離れても悪魔との対決は終わらない。私たちは悪魔に屈するかもしれない。だがキリストは悪魔と死に勝ち給う。キリストに従う者は「霊の内に在って荒野を彷徨い(4:1)」、共に十字架で死に、共に永遠を生きる(ロマ 6:8)。



#### 【おまけのひとこと】

神経質に防寒しても 襟足や手首から寒気は侵入してくる 悪もまた 僅かな隙間さえ見逃さない  
「霊に満たされる」者は 悪を伴う己が日々目を見張ることなく 引きまわされて荒野を彷徨する